

令和7年度良好な水環境保全・活用モデル事業

# 大浦川再生型ツーリズムプロジェクト 報告書

2026年2月  
株式会社 わんさか  
(沖縄県名護市)

朝日のそばの  
販売所  
わんさか大浦パーク  
Wansaka Oura Park

## I. 地域の概要～地域の特徴と活動の背景～

大浦川流域の特徴と概要 .....	P.2～P.5
これまでの活動の内容・取組 .....	P.6～P.7

## II. モデル事業の実施内容

モデル事業の目標と事業の概要 .....	P.9
モデル事業の実施体制 .....	P.10
モデル事業実施スケジュール .....	P.11
事業内容①～③ .....	P.12～P.20

## III. 成果と今後の課題・展望

成果と期待される波及効果：「再生型ツーリズム」による好循環の創出 ...	P.22
水環境保全・活用に資する仕組み .....	P.23
今後の課題と展望 .....	P.24

# I. 地域の概要

## ～地域の特徴と活動の背景～

株式会社わんさか

朝日のそばの直売所  
わんさか大浦パーク  
Wansaka Oura Park

## ■ 大浦川流域の概要

### 自然と暮らしが共生する「重要湿地」

#### 1. 希少な自然環境と豊かな生態系

- 沖縄本島有数のマングローブ林：名護市東海岸に位置し、河口部には北限域のマングローブが広がる。

- 「日本の重要湿地500」：環境省が選定する貴重な水環境として登録されている。

- 多様な生物の宝庫：淡水魚類、甲殻類、昆虫類などが形成する豊かな生態系が大きな特色。

#### 2. 地域コミュニティと暮らしの結びつき

- 生活に不可欠な川：大浦・大川集落に面しており、古くから住民の水源、食糧調達、遊び場として生活と共にあった。

- 伝統の継承：郷土愛、コミュニティの結束が強く、近代化が進む沖縄の中で伝統的な価値観や行事が脈々と受け継がれてきた地域である。

#### 3. 直面する地域課題（負のスパイラル）

- 過疎化と高齢化の進行：人口は減少傾向が続いており高齢化率は40.5%に達している（令和5年時点）。

- 守る力の弱体化：過疎化によりコミュニティの力が弱まり、自然や風景を守り活用する力も衰退してきている。

（出典：イラストAC）



沖縄県名護市

源流域は水源地として活用され集落の**生活用水**、畑への**農業用水**として使われている。

水源地

かつて薪や農業資材として生活を支えたマングローブ林は、生活様式の変化により直接的な利用が途絶えかけた。しかし、1995年名護市の天然記念物指定を機に**自然的・教育的価値**が再評価され、現在は「わんさか大浦パーク」が**ツーリズム資源**として活用。2016年には**地域振興と自然保全の両立**を目的に全長726メートルの遊歩道を整備。**地域の宝**として、その価値が再び磨き上げられている。

沈下橋

収穫された**農産物**はわんさか大浦パークに出荷され、地域の人たちの収入源に。

畑

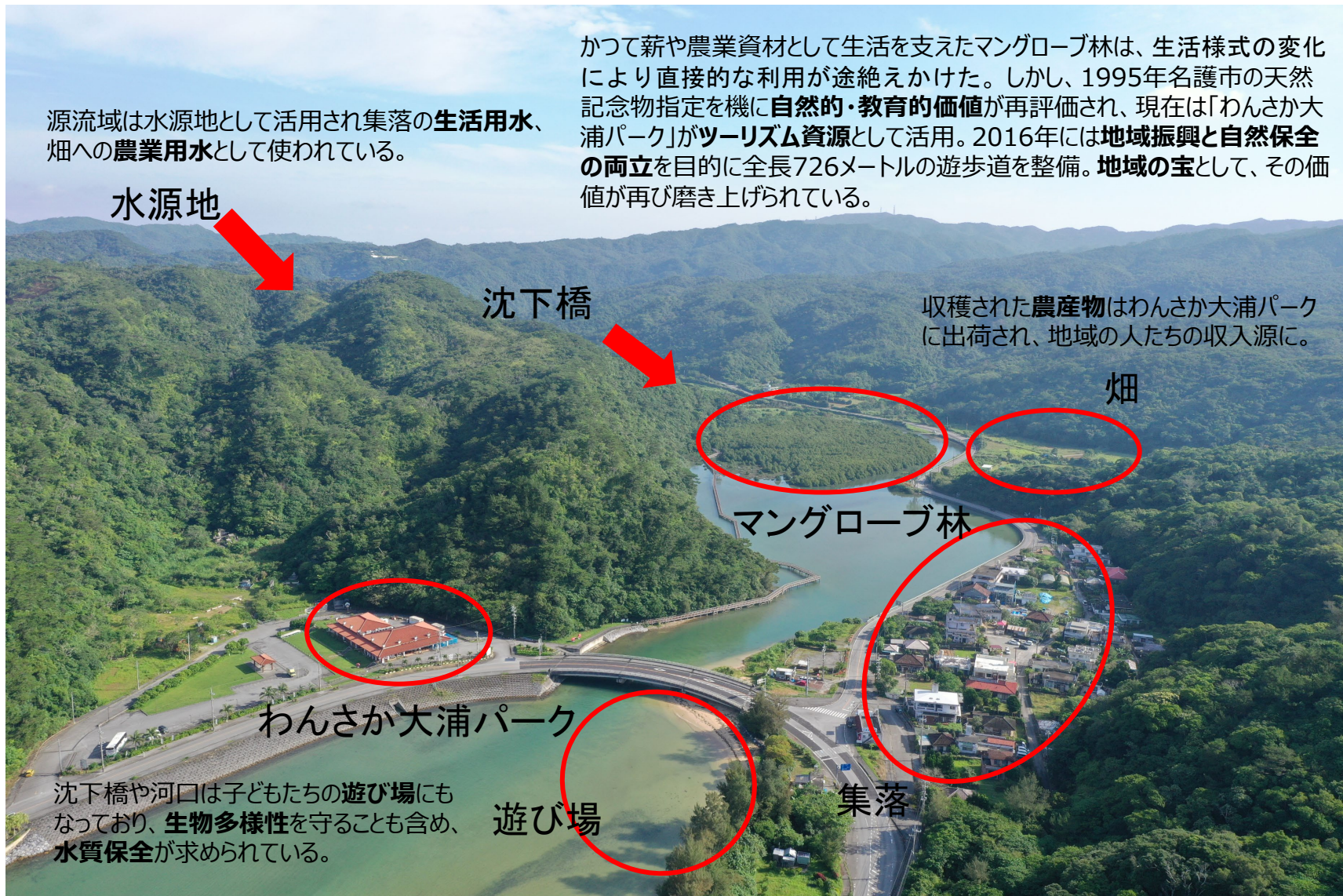
マングローブ林

わんさか大浦パーク

沈下橋や河口は子どもたちの**遊び場**にもなっており、**生物多様性**を守ることも含め、**水質保全**が求められている。

遊び場

集落



## ■ 地域づくりの拠点わんさか大浦パーク

### ● 運営体制と成り立ち

◦ 名護市東海岸**10の集落**が**出資**する「株式会社わんさか」が、指定管理を受けて運営。2011年の開業、地域住民と来訪者が集う**交流の拠点**。関係人口創出、移住のきっかけづくりの役割も担う。

### ● 経営コンセプト

◦ 「**地域の風景と暮らしを守り、未来をつくる商品・サービス・施設**」を合言葉に、持続可能な地域づくりを目指す。

### ● エコツーリズムの推進

◦ 地域の自然資源を活かした**マングローブカヤック**や**遊歩道散策**を展開。

### ● 地域経済と食のつながり

- **直売所（あたいぐわマルシェ）**：地元の生産者が育てた年間100種類以上の野菜や40種類以上の果物が並ぶ。
- **レストラン（あたいぐわキッチン）**：地域食材をメインとしたメニューを提供。訪れる人が**地域の恵みを直接感じられる場**。



## ■ エコツーリズム事業と保全活動

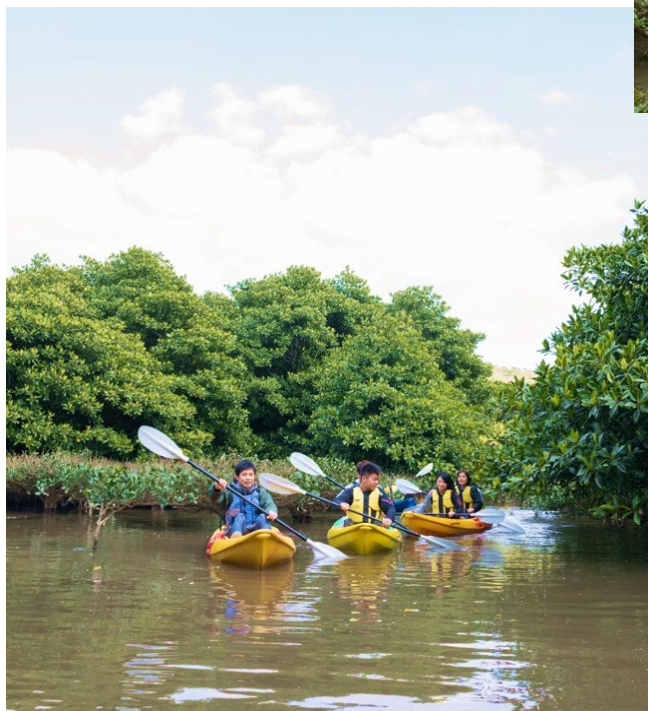
### カヤック体験

利用者数：3,334名/年（R7）

一般2,108名 修旅団体：1,226名

### マングローブ遊歩道

一般利用者数：5,739名/年（R7）



- ・2011 年よりマングローブカヤック体験を開始
- ・2014 年に保全利用協定を締結  
事業者同士や地域との連携ルールを策定し、環境協力金（寄付金）の仕組みを整備。令和 6 年実績は 42 万円。半分を大浦区に寄付し、半分をわんさか大浦パークが保全利用協定事務局運営やモニタリング活動、保全活動の事務局費用として活用。
- ・2016 年にマングローブロードがオープン  
一般顧客・修学旅行・企業団体など幅広い活用  
旅行会社やホテルとも連携が進み、受け入れを拡大中。
- ・経営努力により、**地域経済の活性化と環境保全を支える重要な収益源へと成長しつつある。**

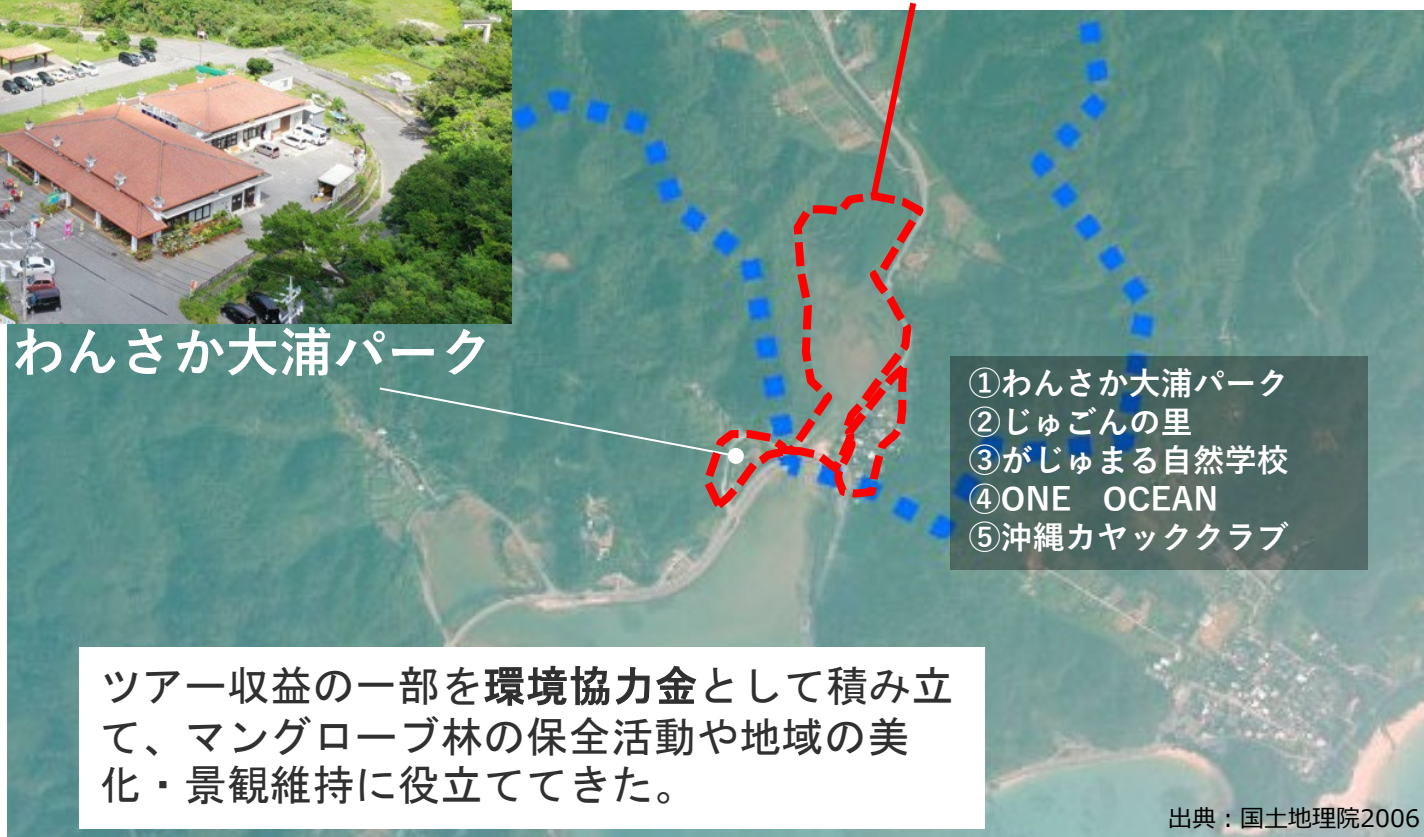
**過疎化の負の循環を止めるにはさらなる事業成長が必要**

## ■ 沖縄県認定 保全利用協定（2014年～）

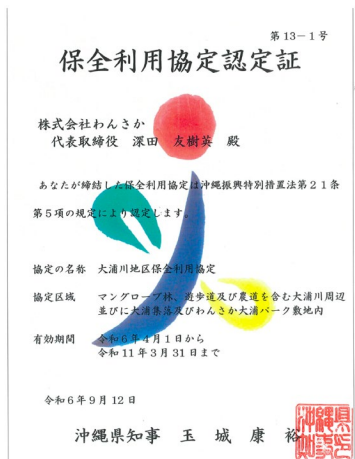


わんさか大浦パーク

### 協定締結地域



出典：国土地理院2006



**自然環境の現状や変化を捉え、適切な保全をするには科学的視点を入れ  
モニタリングや保全の取り組みを充実化させていく必要がある**

## Ⅱ. モデル事業の実施内容

株式会社わんさか

朝日のそばの直売所  
わんさか大浦パーク  
Wansaka Oura Park

## ■ モデル事業のねらい

わんさか大浦パークを「地域づくりの拠点」として最大限活用しながら、大浦川流域の生態系、水質保全と地域経済活性化を一体的に進める「再生型ツーリズム」のモデルを確立。訪問者の増加が保全・再生とコミュニティの強化につながる好循環を生み出すことを目指す。

## ■ モデル事業の目標と概要

朝日のそはの直売所  
**わんさか大浦パーク**  
Wansaka Oura Park



事業期間中の運営については株式会社わんさかを主体とし、その他の関係機関・団体については、情報共有や意見交換会への参加、知見共有や支援協力などいただいた。事業期間中の連携実態と、事業終了後の連携イメージを以下に示す。

## 応募者・実施主体

朝日のそばの直売所  
**わんさか大浦パーク**  
Wansaka Oura Park



## 関係機関

大浦区、名護市久志支所  
名護市教育委員会

- ・研究知見の共有
- ・保全・再生活動の方向性を相談

## 事業協力団体

ダイビングチーム  
すなっくスナフキン

- ・生き物調査の実施
- ・研究知見の共有

名桜大学  
プロジェクト学習

- ・学生参加
- 流域住民ヒアリング
- 生き物調査

一般財団法人ネイチャープレナー・ジャパン

- ・体制構築支援
- ・プロジェクト設計支援

## 将来的な協働を見込む団体

- ・一般財団法人沖縄美ら島財団  
人材育成、修学旅行受入連携、保全活動への協力
- ・JAMSTEC 国際海洋環境情報センター(GODAC)  
探究学習プログラムの開発、修学旅行受入連携
- ・旅行会社、教育会社など  
ツアーの販売、企業との協働の構築



## ■ 実施内容 ヒアリング・意見交換会

ステークホルダーおよび流域住民へのヒアリング、専門家を交えた意見交換会を実施し、現状の把握、流域住民が考える課題及び展望の確認、並びに専門家からの助言を踏まえ、骨子策定の基礎資料とした。



流域住民8名、ステークホルダー2名にヒアリング



流域住民・ステークホルダーとの意見交換会実施(6月30日、10月6日)

### 【ヒアリング結果】

- ・昔は道路が低かった(現在は集落の方が海拔が低い)ため川から水が溢れてもすぐに海の方に流れて行って集落内に溜まることはなかった。
- ・大浦川はもっと深かった。潮が引いても、現在のように完全に水が引くことはなかった。  
→赤土や泥の堆積が理由で底が上がっているのではないか？
- ・水質の変化が気になる。昔は見かけたティラピアやクラゲ、ゴカイも今は少なく、全体的に川の生態系が変わっていると感じる。
- ・すでに豊かな自然と恵みがある川なので、開発よりも、「今ある自然を守る」「水質を保つ」ことを大切に、子どもたちや孫たちが釣りや川遊びを楽しめるような環境を残していきたい。

### 【流域住民からの意見】

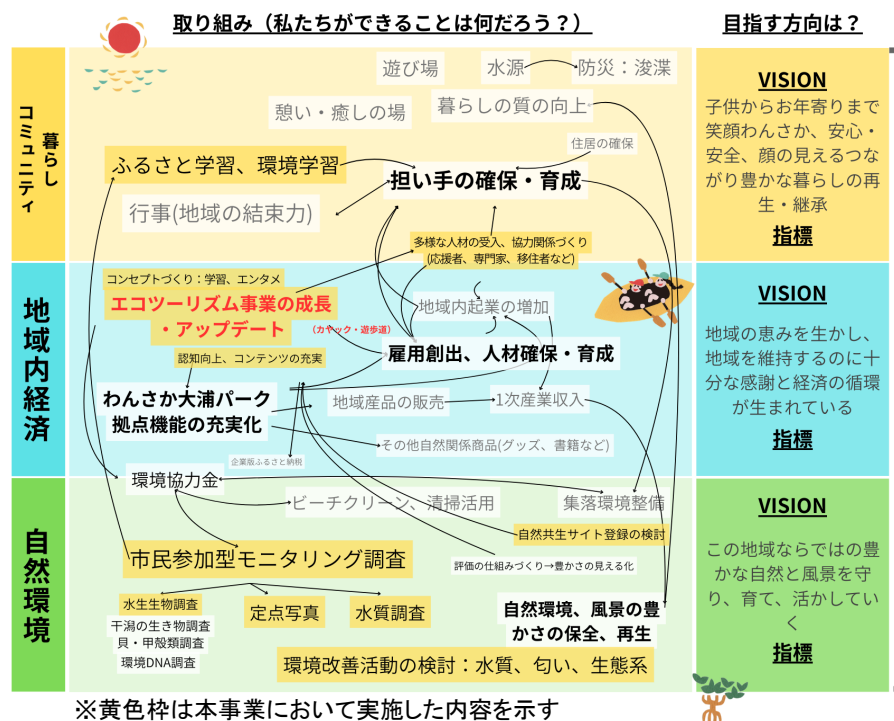
- ・水質の良い悪いなど、わからないことは不安に繋がるので、それらを科学的に明らかにすることが必要である。
- ・子供に自然の遊び方を教える場になってほしい。どろんこや川遊び等。都会からも人を呼ぶツールにもなる。

### 【有識者からのコメント・ご意見】

- ・この地域の暮らしは、住民にとって魅力的なだけでなく観光客目線でも魅力がある。ここでの暮らしをストーリーに乗せて書き起こし、科学的な裏付けをもって安心安全な暮らしをつくっていくことで、更に地域の魅力を高めることができる。
- ・地域拠点として、エコツーリズムにより事業成長させることが大事。人材育成も地域活性も保全も進む。生物多様性は大きな魅力。マングローブの体験といえばわんさか大浦パークという認知を作れるといい。

## ■ 実施内容 保全・自然再生方針検討

ヒアリング・意見交換会を受け、連関図及び骨子の作成。長期的運営体制検討については、一般財団法人ネイチャープレナー・ジャパンに専門的助言を依頼し、体制強化のためにフェロースhip制度への応募検討、協働団体企業呼びかけツールの制作などを実施。再生型ツーリズムの理念を反映した事業設計及び運営方針並びに地域関係者との連携体制構築を進めた。



※黄色枠は本事業において実施した内容を示す

訪れるほど、自然・地域・人がつながりを取り戻し豊かになる

自然と地域と関わるみんなに、いいことを。協働企業・団体様大募集！

### 大浦川で取り組む地域貢献アクション

この地域は豊かな自然やコミュニティが継承されている一方で、過疎化が進みコミュニティの力が弱まるにつれ、自然や風景を守る方も急速に弱まってきているという問題に直面しています。

わんさか大浦パークでは、現在「大浦川再生型ツーリズムプロジェクト」を立ち上げ、コミュニティの力で自然を守る力を同時に高めることを目指し、下記3つを含む保全活動・ツーリズムのアップデート、自然共生サイトの登録準備を進めています。

しかし、私たちや地域住民の活動だけでは追いつかない現状です。そこで、活動をより充実させるため沖縄県内企業・団体の皆さまと連携したいと考えています。地域に根ざす企業・団体だからこそできる社会貢献、社員の皆さまが地域や自然と関わり向き合う機会として、ぜひ協働の可能性をご検討いただけたら幸いです。

沖縄の自然を守ることは、地域の未来を守ること。

こんな企業・団体様におすすめ！

- ✓ 地域の自然環境・暮らしへの直接的な貢献をしたい
- ✓ 沖縄発のSDGs・ESG・CSR活動としての発信
- ✓ 社員の環境意識向上、社内コミュニケーションの促進
- ✓ 地域との継続的な関係づくり・信頼構築

3つの協働

- 1 水質調査**  
バックテストなどで上流下流などポイントに分けて調査します。身近な川の状態を「知る」ことが、環境保全の第一歩となります。
- 2 生物モニタリング**  
川やその周辺に生息する生きものを観察・記録します。地域の生物多様性への理解を深め、保全活動につなげます。
- 3 リパークリーン**  
大浦川流域や河口・海岸部を中心に清掃活動を行い、地域の美しい環境を守ります。

※大浦区子ども会、青年会とも連携しながら行います。  
※活動内容・実施規模は、企業・団体様のご希望に応じて調整可能です。

お問い合わせ  
大浦川再生型ツーリズムプロジェクト事務局 Email: a-hattori@wansaka-o.jp  
株式会社わんさか 担当：服部、深田 TEL: 0980-51-9446

わんさか大浦パーク  
Wansaka Oura Park

意見交換会やヒアリングの際に挙げられた地域課題と取組を「暮らし」「地域内経済」「自然環境」で整理し、それぞれのつながりが見える化、それを基にビジョンを作成した。

＜協働団体企業呼びかけツール＞

## 保全・再生プロジェクト骨子

方向性をステークホルダーに共有できるように骨子づくりに取り組んだ

- 実施場所：沖縄県名護市大浦川流域（下流部）
- 実施期間：～令和13年3月末（5年ごと見直し）

### 【骨子の項目】

- ①背景と目的
- ②プロジェクトのビジョン
- ③課題と施策

暮らしコミュニティ、地域内経済、自然環境に分けて記載

- ④アクションプラン

令和8年度の実施項目と次年度以降の計画・目標を記載

## ■ 実施成果

- ステークホルダー・流域住民へのヒアリング及び意見交換により、観光を自然や地域の「再生のエンジン」として位置付ける方向性が共有され、それを基にプロジェクトのビジョンを取りまとめた。
- 令和8年度以降を見据え、保全活動の推進体制の確立、市民参加型調査データを活用した自然共生サイト登録に向けた動き、関係人口の構築といったフェーズごとの進行計画が整理できた。

### 課題と施策

#### 暮らし・コミュニティ

- 課題**
- 子どもたちが安心して遊べる状態で川で遊ばせたい
  - 暮らしとともにある大浦川をこのままの状態を守っていききたい
  - 魚釣りなど自然とともに生きる力を子どもたちに学ばせたい
  - 洪水の災害リスクを減らしたい
  - 過疎化によるコミュニティの力の衰退→自然や風景を守る力の衰退
  - 担い手の不足

- 施策**
- 定期的な水質調査の実施
  - ふるさと学習など学校連携及び学びの場づくり
  - 再生型ツーリズム施行による関係人口・担い手の確保

#### 地域内経済

- 拠点施設としての機能強化
  - 来訪者数&売上向上
- エコツーリズム事業のアップデート
- 人材の確保、教育
- 地域内連携の強化

- 営業強化、推進体制の構築
- 情報発信、普及啓発で来訪者増へ
- 再生型ツーリズム参加者の施設内（地域内）消費促進

#### 自然環境

- 生態系の変化を確認するためのデータの蓄積がない
- 下水整備がない地域のため住民の協力が必要
- 定期的な水質検査の実施が必要
- 赤土や土砂の堆積による水位の低下
- 大潮満潮時、かつ大雨が重なった時の集落への出水

- 市民参加型調査の試行・蓄積
- 再生型ツーリズムの推進
- 自然共生サイトへの登録
- 環境協力を活用した保全活動の実施



ページイメージ

## ■ 実施内容 生物調査の試行

生態系の変化を把握するための継続的なデータが不足していること、地域の子どもたちが自然と関わりながら学ぶ機会を確保する観点から8月24日、9月14日地域住民と連携し生き物調査を実施。今後も定期的に継続予定。

### <生物調査結果>

#### ○ 8月24日大浦川河口（沈下橋周辺）

調査参加者数：10名

イシマキガイ、ミナミトビハゼ、ヒメヌマエビ、アマミイシモチ、ゴカイの仲間など24種採取。鳥類も4種見られた。

#### ○ 9月14日（日）大浦川中流域（砂防ダムの下流）

調査参加者数：14名

ナミウズムシ、サワガニ、ナガレトビケラ類、カワニナ類、リュウキュウハグロトンボ（成虫）、ナガノゴリオキナワヒゲナガカワトビケラ（幼虫）、など18種採取。



2025年8月 水生生物調査 記録写真（調査地：名護市大浦川河口 沈下橋周辺）①  
撮影：渡邊ちひろ



アマミイシモチ



ハゼのなかま



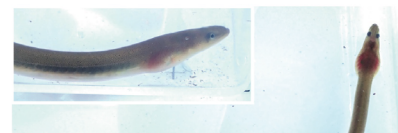
ハゼのなかま



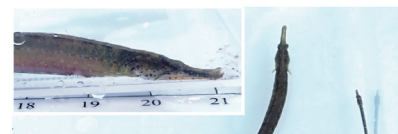
カワアナゴのなかま



トビハゼのなかま



オオウナギ（幼魚）



イッセンヨウジ



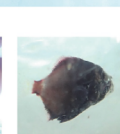
イッセンヨウジ



ゴマハゼのなかま



スジモヨウグ（幼魚）



クロシマンジュウダイ（幼魚）

## ■ 実施内容 定点カメラの設置、生物リストの作成、水質調査

### 【定点カメラの設置】

侵略的外来種マングースが確認された。甲殻類の捕食など生態系への影響が懸念されるため、継続して調査・情報収集を行い対策を検討していく。



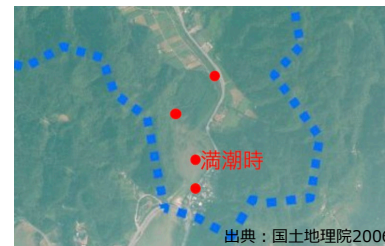
### 【データベース用生物リストの作成】

国土交通省河川水辺の国勢調査の生物リストをもとにデータベースを作成し、過去の調査記録を反映した。今後生き物調査隊も含めた取り組みで得た記録を蓄積していく。

学名	種和名	種小名	魚類	底生	植物	鳥類	両爬虫	昆虫	プランクトン	2015年出現種	2025年出現種
Psychotria asiatica	ホトヨウジ	asiatica			●					●	
Spermacoce rem-naga	ハハリアフタバ	remota			●					●	
Catharanthus roseus	ロゼニチソウ	roseus			●					●	
Carbera manghas	ミヅクサギ	manghas			●					●	
Ipomoea pes-caprae	ガンハイヒルガオ	pes-caprae			●					●	
Plantago asiatica	オオハコ	asiatica			●					●	
Scutellaria rubrocapitata	アカボシタツナミノウ	rubropunctata			●					●	
Vitex rotundifolia	ハマゴウ	rotundifolia			●					●	
Volkmertia inermis	イボタササギ	inermis			●					●	
Verbena litoralis	ハマクマツヅラ	litoralis			●					●	
Ilex integra	モリノイ	integra			●					●	
Scaevola taccada	クサトベラ	taccada			●					●	
Ageratum conyzoides	コウコウアザミ	conyzoides			●					●	
Blumea lacera	ヤエヤマコウゾリナ	lacera			●					●	
Crepidiastrum lar-hon	ホノハワダン	lancoelatum			●					●	
Erigeron canadensis	ヒメムシヨモギ	canadensis			●					●	
Farfugium japonicum	ツツブキ	japonicum			●					●	
Lactuca indica	オニノゲシ	indica			●					●	
Melanthera biflora	キダチハマグルマ	biflora			●					●	
Sonchus asper	オニノゲシ	asper			●					●	
Sonchus wightianus	タイワンハチジョウナ	wightianus			●					●	
Symphytichum subulatum	ホウキキク	subulatum			●					●	
Youngia japonica	オニタビラコ(広義)	japonica			●					●	
Schefflera heptaphylla	フタバキ	heptaphylla			●					●	
Clittem faba	カカコイ	faba			●					●	
Caridina serratrix	ヒメヌエビ	serratrix			●					●	
Palaemon debilis	スナガエビ	debilis			●					●	
Metopograpsus latifrons	ヒルギハシライワガニ	latifrons			●					●	
Parasarsarma bidens	フタバカクガニ	bidens			●					●	
Varuna litterata	オオヒライワガニ	litterata			●					●	
Thymopocellus choreutes	ツマダゴロニ	choreutes			●					●	
Anapurus nabilium	アツマンメンボ	nabilium			●					●	

### 【水質調査】

沈下橋、マングローブ林内、集落前、カヤック実施箇所の4箇所で水質調査（BOD、COD、大腸菌数など7項目）を実施



「水質汚濁に係る環境基準」A類型とした場合、沈下橋（干潮時）のみ、BOD、大腸菌数が基準値越え。満潮時や季節ごとの調査の実施など、引き続き定期的な調査を行い現状把握、対策の検討をしていく。

## ■ 実施成果

- 生物調査を流域住民と連携して行うことにより、自然環境を主体的に守る意識醸成や、子どもたちの環境学習機会の創出につながった。
- 生物リストを作成することにより、今後の調査結果を体系的に蓄積・比較できる基盤を整備した。これにより、科学的根拠に基づく保全判断が可能となる体制の基礎を確立した。

## ■ 実施内容 コンセプト、ツアー内容のアップデート

観光を自然や地域の「再生のエンジン」とすることを目的に、従来のアクティビティ主導型の自然体験ツアーを見直し、**簡易的なモニタリング、保全活動を体験プロセスに組み込んだ「再生型ツーリズム」**へとコンセプトと内容を刷新した。また、ターゲット別にツアーを展開することに。（次頁に記載）

### 【一般の国内旅行者向けのツアーの仕組み】

ガイドは自然を守り地域とつなぐ「調査隊」としてのミッションも持ち、来訪者はその「協力者」として調査に参画。カヤック体験や遊歩道散策の最中に、見つけた生き物や環境の変化を記録し、データを蓄積。

## 訪れるほど、自然・地域・人がつながり豊かになる

### 大浦川再生型ツーリズムプロジェクト

マングローブ林  
カヤック・遊歩道散策

### 体験の3つの柱

感じる

マングローブ林、汽水域、生き物、音、匂い、風、旬の食材、地域の営みなどを五感で体感。

考える

マングローブや川、海などの自然、水質・地域の暮らし・経済とそれぞれのつながりを紹介。

関わる

見つけた生き物や環境の変化を写真やメモ等で記録しデータを蓄積。

体験以外の  
つながりPOINT

直売所には地域の農家さんの作物が並び  
レストランでは地域食材を使ったメニューで  
地域とのつながりを感じていただけます

来訪者自身が自然環境の保全と  
地域づくりの担い手の一員に

再生型ツーリズム  
の狙い

- ① 利用が増えるほど、調査データと保全に活かせる情報や知見が蓄積される
- ② 来訪者が増えるほど自然環境の保全と地域活動が加速する
- ③ 観光が「負荷」ではなく「再生のエンジン」になるモデル

参加=貢献に

- ・データの蓄積が環境の変化に気づく手がかりに
- ・参加費の一部は環境協力金として保全活動へ
- ・自然・地域・人のつながりを知り関わることで循環の担い手の一員に

活用で未来へ

- ・データで変化への対策を
- ・環境協力金の活用で循環の輪を広げる
- ・再訪を促すきっかけに
- ・新規来訪者へのPR

従来の「見る・楽しむ」観光ではなく、**感じる → 考える → 関わる** の体験プロセスを導入し、ガイドを通じて自然と地域の関係性を学ぶ機会を創出し、来訪者が自然環境保全と地域づくりに関与する仕組みを構築。

ガイドは参加者と一緒に見つけた生き物をデータベースに蓄積。見える化する。

## ■ 実施内容

**ターゲット別のツアー展開：共通コンセプト「感じる・考える・関わる」の最適化とツール制作**  
参加者の特性に応じた体験プロセスを提供

### **修学旅行生向け：大浦川マングローブ探究学習プログラム** 次頁①参照

- **探究学習型プログラム**：従来の自然体験型コンテンツから発展させ、必要に応じワークシートを活用し、生徒自身が「自然・コミュニティ・経済のつながり」を体験から学び考える**教育的価値**を重視するプログラムにアップデートした。
- **地域コミュニティや地域経済との接点**：カヤック体験や散策に加え、直売所でのレクチャーやわんさか大浦パーク施設見学時間を設けることで、地域コミュニティにとっての取り組みの意味や地域の生業や経済循環をトータルに理解する場を提供し。
- 修学旅行受入の機会を活用し、試験的に本プログラムを2回実施した。

### **一般の国内旅行者向け：貢献が見える、心が豊かになる体験** 次頁②参照

- **貢献の実感**：「楽しむことが地域に良い影響を与える」ことを丁寧に伝える。ツアー前にわんさか大浦パークがコミュニティの拠点であり、地域づくりの一環として取り組んでいることを解説。終了後には**環境協力金の役割**や調査データの意義や感謝を記したツール（サンクスカード等）を手渡すことで、**貢献の余韻**を残す。
- **再訪意欲の向上**：払って終わりではなく、「自分の参加が役に立った」という実感を通じて、地域との心理的なつながりとリピーター化を促進する。

### **協働企業、団体向け：保全活動と地域づくりへの直接参画**

- **パートナーシップ**：企業、団体を単なる「支援者」ではなく、共にフィールドを育む「パートナー」と位置づける。
- **多様な関わり代**：生物調査・モニタリングへの参加、リバークリーン、環境教育活動への関与など、企業のリソースに応じたプログラムを設計。
- **価値創出**：実際の保全活動への参画を通じ、**ESG・生物多様性対応、社員研修、地域連携**といった具体的な価値を提供する。
- 協働によりブラッシュアップされた体験や交流プログラムを企業向けの研修や旅行商品として販売することも将来的に目指す。



## ■ 実施内容 モニターツアー実施

- 大浦川再生型ツーリズムプロジェクトのフィールドツアー
- 日時：2026年1月27日（火）14時～17時
- 場所：わんさか大浦パーク及びマングローブ遊歩道（大浦集落）
- 目的：販売、モニタリング・清掃など協働の可能性の模索
- 内容：造成したツアーの紹介、拠点施設の案内、フィールド体験、意見交換会
- 参加者：20名（旅行社、観光業者、専門家、県内企業、地域住民など）



## ■ 実施成果

- フィールドツアーを実施したことにより、**5社・団体から協働の提案**をいただいた。
- ツアーそのものをモニタリングの機会とする仕組みは**新しい市民サイエンスの可能性**として高い評価が得られた。
- 実際にフィールドを案内したことで、今後の事業化に向けた具体的な課題と改善案が浮き彫りになった。
  - **通信環境の整備**：マングローブエリアでの電波改善や、衛星通信（スターリンク）の導入、オフラインでも活用できるタブレットの検討。
  - **解説ツールの充実**：双眼鏡の導入や、鳥の声・生物をビジュアルで補足できる写真素材、タブレット端末活用の提案。
  - **導入・物語（ナラティブ）の重要性**：ツアー前のオリエンテーションが充実していたため、フィールドワークの没入感が高まったと評価され、今後も事前学習や地域の歴史・コミュニティを繋ぐストーリー設計を重視する方針が固まった。
- マングローブ単体ではなく、**源流から海までの「流域」全体を主語にしたストーリーを編み直す**ことで、他地域にはない強み（短距離で流域全体を体感できる希少性）を活かせることが再認識された。

# Ⅲ. 成果と今後の課題・展望

株式会社わんさか

朝日のそばの直売所  
わんさか大浦パーク  
Wansaka Oura Park

本事業を通じて、観光を自然への負荷ではなく、環境保全と地域活性化の「エンジン」とする「再生型ツーリズム」の基盤を確立することができた。

## 事業開始前の課題

過疎化と高齢化の進行それに伴う自然や風景を守る力の弱体化

解決策として→既存ツーリズムの参加者を保全と地域づくりの担い手にするモデルに再構築

### 「再生型ツーリズム」モデルの確立

「感じる・考える・関わる」の3本柱を軸とした体験設計を行い、修学旅行向けの探究学習プログラムや、一般向けの貢献実感型ツアー、企業団体向けの協働プランを確立。

### モニタリングの仕組みの拡充

「生き物調査隊」として、来訪者がツアー中に生物情報を収集・蓄積する「市民サイエンス」の仕組みと未来に生かすためのデータベースを構築。また、定点カメラの設置で外来種の影響をチェックする体制を導入。

### 環境協力金の仕組みの強化

環境協力金を保全活動（リバーグリーンや生物調査等）に還元するという用途を明確化し、成果をサンクスカード、HP等で伝える「見える化」を実装した。

方向性をステークホルダーに共有できるように骨子にまとめた

## 期待される波及効果

- **自然環境を守る力の向上**： ツーリズムにより自然との関わりが深まり、守る人材が育つと同時に、観光収益が保全活動の財源となることで、マングローブや汽水域の保全、水質改善が持続的に行われる「再生のエンジン」が駆動する。
- **地域経済の循環加速**： ツアーと「わんさか大浦パーク（直売所・レストラン）」の動線を統合することで、地域製品の販売促進と地産地消を促し、地域内での経済循環が最大化されていく。
- **地域コミュニティの活性化とウェルビーイングの向上**： 自然とコミュニティのつながりを再認識することで、住民の地域に対する誇り（シビックプライド）が醸成され、担い手確保や過疎化の抑制、地域の安心・安全（防災意識等）の向上に寄与する。

## 訪れるほど、自然・地域・人がつながり豊かになる姿へ

来訪者が「保全と地域づくりの担い手」の一員となることで、関わる全ての主体がウェルビーイングを実感できる、持続可能な地域の未来を実現する。

## ■ 観光を「再生のエンジン」とする循環モデル

大浦川流域の生態系、水質保全と持続可能な地域経済活性化を目的に、**観光を「再生のエンジン」とする循環モデル**を構築した。

1. ツアー参加者を**調査協力者**と位置づけた**簡易モニタリング体制**を整備。**生物情報や水質データを蓄積**し、科学的根拠に基づく保全方針に活用する。
2. ツアー料金の一部を**環境協力金**としてリバークリーン、生物・水質調査、環境教育などの具体的な**保全活動の直接的な財源**とし、成果をウェブサイト等で**可視化**することで継続的な支援を促す。
3. 2026年度の「自然共生サイト（OECM）」登録を目指し、行政・専門家・地域住民・企業が協働する**保全体制を構築**する。「わんさか大浦パーク」を中核とし、沖縄県認定の保全利用協定に基づく一元的な管理を徹底するとともに、企業・教育機関との連携を通じて外部資源を地域、環境保全につなげる。

これにより、ツアー参加者の増加が調査データと保全財源の蓄積につながる好循環の確立を目指す。



大浦川流域の自然と暮らし・コミュニティを守り観光を「再生のエンジン」とするモデルを深化させるため、直面する課題を解決し、以下の4点を重点的に推進する。

## 人材育成の充実化：ガイドの役割の拡大

- **【課題】** 現在のガイドは「案内」が中心であり、生物多様性のモニタリングを担い、地域コミュニティの課題とツーリズムをつなげ、環境保全の取り組みをコーディネートする専門人材（パークレンジャーのような役割を担う人）が不足している。
- **【展望】** 単なる案内人から、「調べ・守り・地域とつなぐ」役割を担うレンジャーへのアップデートを図る。専門家による生物調査研修や地域住民へのヒアリング、コーディネーターのスキル研修など育成プログラムを充実化するとともに、外部のフェロシップ制度やインターン等を活用し、意欲ある若手人材を地域に呼び込む仕組みを構築する。

## 拠点施設の「ビクターセンター化」と情報発信の強化

- **【課題】** 年間10万人の来訪者がいるが、その多くが直売所、レストラン利用に留まっており、プロジェクトのコンセプトや大浦川の価値が十分に伝わっていない。
- **【展望】** 「わんさか大浦パーク」を**地域環境の情報発信・学習拠点（ビクターセンター）として再定義**する。サイン整備や立体展示の導入、アーティストと連携した生き物グッズ企画などを通じ、プロジェクトを視覚的・直感的に伝える。また、環境協力金の使途を施設内でも公開し、来訪者の貢献を「見える化」する。

## 再生のエンジンとなる収益基盤確立

- **【課題】** プロジェクトの推進にはわんさか大浦パークの経営基盤の安定化とツーリズム事業の拡充が鍵となるが、現時点では収益基盤が弱く不安定な状況にある。コミュニティとの関わりや環境貢献という独自の価値が旅行者の「選ぶ理由」として十分に機能しきれていない状況もある。
- **【展望】** 売上規模の拡大に向け、今期アップデートした「**探究学習**」を軸とした**修学旅行、一般向けの貢献実感型ツアーの営業を強化**していく。近年わんさか大浦パークでも集客が伸びつつあり欧米豪を中心としたインバウンド市場はポテンシャルが高く、他社の対応が遅れているため、**インバウンド対応**した商品造成や受入体制の整備にも着手し、他社との競争を回避しながら安定的な事業成長を図る。専門家と連携した**ブランディング**により、「楽しむことが環境保全につながる、コミュニティベースのツーリズム」という独自のブランド価値を確立し、競合との差別化を図る。

## 保全・活用基盤の強化と多様な主体との「共創」の場づくり

- **【課題】** 今期築いた基盤を元に科学的なデータに基づいた保全・再生活動の充実化が必要であり、担い手の確保のために企業や地域外の協力者が継続的に参画できる仕組みの充実化を図る必要がある。
- **【展望】** 2026年度中の「**自然共生サイト（OECM）**」登録を目指し、科学的なモニタリング体制を公認のものにする。定期的なフィールドツアーの実施により、プロジェクトを支える「**応援団（関係人口）**」を創出するとともに、企業のESG・生物多様性対応を支援する**協働プログラム（リバークリーンや生物調査等）**を標準化し、参画の機会を最大化する。